

Computer Report

Vol. 58 No. 11 11月号 (通巻 770号)

はじめの言葉

■学生の売り手市場だと言われる波がきている。企業側の買手市場か、学生側の売り手市場かの波は、これまでも繰り返されてきた。背景は景気の変動である。好景気は、政府／実業界／国民が常に望むところだが、思うようにはいかない。不況期には皆が苦しむが、とりわけその余波は、就職活動に勤しむ学生にストレートに押し迫る。厳しい就職難となる。企業側の買手市場は、学生側に過酷な仕打ちを一方向的に押し付けてきた。

■それが一転、好況の波が見られるや、人手不足だ、人材難だ、良い学生を取りたいなどと企業は、勝手な言い分を並び立てる。ほんの数年前に学生たちに与えた過酷な仕打ちなど見向きもしない。酷い仕打ちを受けた世代への同情も反省も無ければ、見捨てて放置したままにしてきた社会的罪悪感もない。そして、周期的にそうした仕打ちを繰り返して続けてきている。それが日本を代表する経団連大企業の経営者たちの正体である。

■そんな身勝手な大企業集団「経団連」が、来年以降の学生募集活動におけるこれまでの慣習を改めると表明した。いわゆる就職協定の見直しであり、あり体に言えば、一方的な協定破棄である。大企業の身勝手さが、露わに見て取れる。理由は、経団連非加盟企業との学生獲得競争に引けを取られないためだ。早い話、新興企業に、なり振り構わず対抗するためだというのだ。経団連のメンツもプライドもない。

■経団連企業の多くがサラリーマン上がりの経営者であるのに対して、非加盟の新興企業の多くは、創業者あるいはオーナー経営者が目立つ。社員の通年採用制を取り入れるなど伝統的エスタブリッシュメント企業とは異なり、常に斬新な施策を展開してきている。事業展開そのものにも独自性があり、何事にも業界横並び制を越えた発想に基づいた展開をしていることで、就職を希望する若い世代に、より強烈な魅力的側面を見せている。

■一方、何でも横並び体制を基本とする経団連加盟の老舗企業が、どういうビジョンのもと、どういう人物像をイメージしているのか明確でないのが気にかかる。今回の就職協定破棄にあたって「良い人材を獲得するため」と声を揃えるのだが、明確な理想的人物像を掲げることなく漠然と「金の卵＝良い人材が欲しい」というのも説得力に欠ける。何もかも横並び制に頼るサラリーマン経営者の安直な発想自体が破綻してきているように映る。

■新たに表面化した事件に免振装置不正問題がある。みんなでやれば恐くないも横並びでトドメを知らない大企業だが、開いた口がふさがらない。様々な不正行為が多発しているのは周知のとおりだが、これも氷山の一角だろう。事業展開に真の責任感を持たないというか、在任中だけの刹那的利益確保しか考えない、文字通り「サラリーマン経営者」の発想が遠因だろう。刹那的人材確保対策も、その延長にある。全てに無責任である。

■こんな経団連に対して、景気浮揚策の一環として、労働者の給与アップを依頼している現政府首脳の間感もどうかしている。まさに刹那的である。国民感覚／事業実感の乏しい者同士のトンチンカン交渉である。そこには、国民生活の実感がない。政権首脳に、日本の国家像／国民生活像が描けていない。だから、国が、企業が必要としている国民像／人材像もイメージできない。限りない危うさを感じる。(藤見)